

概観

川口高校の前身である川口中学が創立したのは昭和十六年四月だった。諏訪山に校舎が新築される期間、川口市立第六尋常小学校（現飯塚小学校）の校舎一部を借りて三学級で発足した。

時に大戦の最中で、諸物資や労働力は極度に不足していた状況であり建築計画に大きな影響を与えた。雑木林だった諏訪山が整地されると、建築資材は集積してあった飯塚小学校から夏休みに生徒等が肩にしょって運び、校舎の骨組みが出来上がると生徒がいちかん一丸となって瓦を葺き床を張った。壁は薄板を打ち付けて上から筵を下げるという応急的なものだった。かくして、木造平屋の校舎二棟が校地の東側に建ち、昭和十八年四月より授業が開始された。春の嵐が吹く季節ともなれば、運動場の砂が教室内に吹き込み黒板の字が見えなくなったとか、また、正門から斜めに登る道は四・五期生によって作られたと聞く。当初の校舎建築予定計画だと、本館木造二階建二棟・講堂・武道場・理科教室・手工教室・附属建物等の校舎が、三年間にわたって竣工する予定だった。総工費四万四三七〇円と記され、木造二階建一棟（延坪五二八・八四坪）が一二万一六三三円だった。資材不足は戦争を追うごとに酷ひどくなり、建築計画は徐々に縮小され、第一期工事の二階建校舎二棟は平屋二棟に変更を余儀なくされたのである。

初代梅根悟校長の教育理念として「学校は地域に密着したものでなくてはならぬ」という考えから、川口は古来から「鑄物の町」として栄え、特に日清・日露・第一次大戦と、戦時に飛躍的な発展をとげただけに、この大戦下に鑄物業・鉄工業の伸展に技術者の養成が急務であるとして、高等工業専門学校を諏訪山台上に建て、川口中学をその附属中学校として、見沼用水のほとりに建築する遠大な計画があった。だが、昭和二十年の戦争終結とともに、高等工業附属中学校の夢はついたが、これは、当時の職員の語りぐさの一つになっている。

